

四諦八正道（三）

最後に四諦（四聖諦）の最後の「道諦」の実践項目として「八正道」についてです。八正道とは次の八つです。

- ①正見……正しい物事の見方。縁起の法や四諦を正しく理解する。
- ②正思惟……正しく考える。
- ③正語……正しい言葉を使う。偽りや悪口を言わない。
- ④正業……正しい行為。盗み、邪淫を行わない。
- ⑤正命……規律正しい生活をする。
- ⑥正精進……正しい努力。善を増大させて悪を減じる。
- ⑦正念……正しい教えを常に忘れないこと。
- ⑧正定……正しい禪定（精神集中）をする。

といった感じです。ひたすら正しいことをせよ、といつてつよいと思いま

す。しかし、仏陀は覺りを得る前に何に行き詰ったのでしょうか。それは骨と皮の身となるような激しい苦行でした。

したがって、八正道で言われるとこの「正しい」とは、極端にならなければなりません。命を削るような苦行主義でもなく、だからといって堕落した快楽主義に耽るのでないことを、「中道」といいます。

中くらいの道という意味ではなくて、極端な「辺生義を超える道」といふ意味です。

これを「中道」といいます。中くらいの道という意味ではなくて、極端な「辺生義を超える道」といふ意味です。

さて、以上が四諦八正道と呼ばれる仏教の基本的な思想であり、仏陀は後に度々、この教えを説かれました。都合により話が前後しますが、仏陀はまだ菩提樹の下で瞑想をしていました。真理を覺った仏陀はこのように思いました。

「この法をさどむことは容易ではない。これは世のつねの流れにさからい、甚深、微妙、精細にして知りがたく、激情」といえられたもの。無明超えていた為に仏陀は沈黙していました。

（つづく）

さて、以上が四諦八正道と呼ばれる仏教の基本的な思想であり、仏陀は後に度々、この教えを説かれました。都合により話が前後しますが、仏陀はまだ菩提樹の下で瞑想をしていました。真理を覺った仏陀はこのように思いました。

さて、以上が四諦八正道と呼ばれる仏教の基本的な思想であり、仏陀は後に度々、この教えを説かれました。都合により話が前後しますが、仏陀はまだ菩提樹の下で瞑想をしていました。真理を覺った仏陀はこのように思いました。

に覆われしものには悟りがたい」

（「Jの人を見よ。ブッダ・ゴータマ

の生涯」増谷文雄／校成出版社）

つまり、仏陀自身は真理の法を

覚ったんだけれども、世を生きる

人々は無明といつ煩悩に覆われて

生きているから、真理の法は理解

できずに覺りへと至ることができる

ないのではないか。

仏陀はこの法を説くために立ち

上がりなければならぬのに立ち

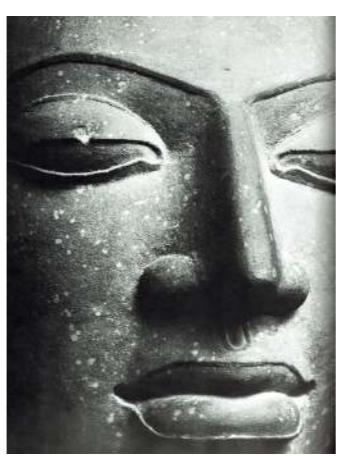
上がらない。ある意味惡魔の誘惑よ

り大きな危機です。衆生の理解を

超えていた為に仏陀は沈黙してし

ました。

（つづく）



→紀元前5世紀頃、北インドでつくられた
ブッダの像の顔。グプタ朝時代後期には
盛んに宗教彫刻がなされたといふ。



合掌（じょうまん）

「聖道性」という言葉でおさえておきたいと思いますが、それは文字通り聖なる道として世間からは讀えられるような慈悲の心です。

では淨土の慈悲とは「体何なのか」

聖人と私たちは仏教で言えますね。とにかく、親鸞

は同じ末法の時代を生きて

います。

それの時代の意味はいつか

寺報で取り上げてみたいで

す。とにかく、親鸞

一マですね。とにかく、親鸞

は同じ末法の時代を生きて

います。

それの時代の意味はいつか

寺報で取り上げてみたいで

す。とにかく、親鸞

動を起こしてみたものの、その人を「たすけどぐること」が「極めて有難い」と。例を出すまでもありませんが、天災や、事故、病気などで苦しい状態におかれている方において切実な問題です。身近なところでは、介護の現場などでも、働く方々のご苦労は言葉にならないでしょう。

つまり必ず「行き詰る」ということでありましょう。それは先ほど申しました「聖道性」の慈悲とは、助ける側の予定概念であるのです。自分の中から起つてきた心を立場としています。少し突っ込んで考えていきます。曇鸞大師（七高僧の二祖）の『淨土論註』には次の言葉があります。

慈悲に三縁あり。つには衆生縁、これ小悲なり。二つには法縁、これ中悲なり。三つには無縁、これ大悲なり。慈悲はすなわちこれ出世の善なり。安樂淨土はこの大悲より生ぜるがゆえなればなり。かるがゆえにこの大悲を謂いて淨土の根とす。ゆえに出世善根生と曰うなり、と。（真宗聖典三五頁）

ここで「小悲」というのは状態を憐れ

むと解せばよいでしょう。そして「中悲」とは人間そのものをいたむ心と教えられています。三つ目の「大悲」はここでは無縁と表現されます。無縁とは対象として憐れむ、いたむ手がかりを必要としないということです。特にこの「小悲」について宮城顕師は

小悲というのは、関わりが狭く、しかもそういう気の毒な状態をなんとかしてあげたいという、妙な言い方かもしませんが、マイナス（-）の状態にあらざる人をせいぜいゼロ（0）の状態にしてあげるのが小悲なのです。（『淨土論註』聞記I／法藏館）

と仰っておられます。

そして「大悲」こそが、「歎異抄」第

阿弥陀仏の御心を指して、まさに阿弥陀仏の御心を指して、まさに苦しむ衆生と同じ身となつて共に苦しんで下さる御心です。

阿弥陀仏の功德には、「攝取不捨の利益」と表現されることがあります。それは、救う相手を選ばないと

いうことだけではなく、共に苦しむという形で苦しむ衆生を攝取する

といふことであります。

ここまで書いてくると何か理想論のような気もしてきます。しかし、人間とは何をもつて救われたと言えるのか、そのような宗教的課題も慈悲の問題を考える根底にあるよう

ここまで書いてくると何か理想論のような気もしてきます。しかし、人間とは何をもつて救われたと言えるのか、そのような宗教的課題も慈悲の問題を考える根底にあるよう

とあります。それは、救う相手を選ばないと

いうことだけではなく、共に苦しむ

といふことであります。

阿弥陀は要求されておられる

とあります。それは、救う相手を選ばないと

いうことだけではなく、共に苦しむ

といふことであります。

阿弥陀は要求されておられる